



一日も早い帰国の実現に向けて！

北朝鮮人権侵害問題啓発週間 作文コンクール2018



入賞作品集

主催：政府拉致問題対策本部

後援：文部科学省、法務省、外務省

■ 一日も早い帰国の実現に向けて!

北朝鮮人権侵害問題啓発週間 作文コンクール2018

入賞作品集

主催：政府拉致問題対策本部

後援：文部科学省、法務省、外務省

北朝鮮による日本人拉致問題は、我が国の主権及び国民の生命と安全に関わる重大な問題であると同時に、拉致された方々の貴重な未来、多くの夢を断絶し、家族とのかけがえのない時間を引き裂く、人権・人道上の由々しき問題であります。

拉致被害者の救出は、日本政府の最重要課題であり、最優先で取り組んでまいります。国民の皆様が心を一つにして、全ての拉致被害者の一日も早い帰国実現への強い意志を示していただくことは、問題解決に向けた力強い後押しとなります。

一方、これまで拉致問題について触れる機会の少なかった若い世代の方々への啓発が重要な課題となっております。

このため、全国の中高生を対象に、授業でアニメ「めぐみ」を視聴し、さらに自分自身で拉致問題について学習し、拉致被害者や拉致被害者御家族の心情を理解するとともに、拉致問題解決のために自分に何が出来るのか、何をすべきかについて深く考える機会としていただくことを目的として、北朝鮮人権侵害問題啓発週間・作文コンクール2018を実施いたしました。

この度、応募された4485作品の中から、入賞作品を文集にしましたので、是非、ご一読いただけますと幸甚です。

平成三十一年一月

政府拉致問題対策本部

作品総数 4,485作品

中学生部門 2,878作品

高校生部門 1,607作品

【最終審査委員】

- | | |
|-------------------|------------------|
| ○北朝鮮による拉致被害者家族連絡会 | 横田 拓也 事務局長 |
| ○毎日新聞社 | 松田 喬和 特別顧問 |
| ○内閣官房拉致問題対策本部事務局 | 岡本 幸 内閣審議官 |
| ○文部科学省 | 丸山 洋司 大臣官房審議官 |
| ○法務省 | 山内 由光 大臣官房審議官 |
| ○外務省 | 田村 政美 アジア大洋州局参事官 |



表彰式の模様（2018年12月15日、東京都千代田区 イイノホール）

目次

中学生部門

最優秀賞	「団結をもって拉致問題完全解決！」	古泉修行	新潟大学教育学部附属新潟中学校2年	6
優秀賞	「関心をもつことから」	増井奏太	三重県松阪市立中部中学校1年	7
	「他人事ではない身近な問題」	高屋瞳華	京都府南丹市立園部中学校3年	8
特別賞	「変えよう、自分」	木原寛太	鳥取県青翔開智中学校3年	9
	「拉致被害者の帰国を願って」	白野さくら	福井県小浜市立小浜中学校1年	10
	「人事ではない。拉致問題の真実。」	内田真実子	神奈川県川崎市立西生田中学校1年	11
	「『めぐみ』を鑑賞して」	川野優花	徳島県阿南市立新野中学校3年	12
	「人生を奪う拉致」	石田みずき	福井県小浜市立小浜中学校1年	13

高校生部門

最優秀賞	「今こそ四十年の時を経て」	藤岡 希	愛媛県立松山東高等学校1年	16
優秀賞	「変わらなくてはならない」	岡島真優	福島県立会津農林高等学校1年	17
	「北朝鮮人権侵害問題」	谷 康大	福島県立平支援学校高等部3年	18
特別賞	「思いを広める」	米澤 愛	石川県立田鶴浜高等学校1年	19
	「拉致問題は世界の問題」	田中優里	広島県立呉昭和高等学校3年	20
	「未来を創る」	長澤パティ明寿	山形県立山形東高等学校2年	21
	「拉致問題から学んだこと」	佐久間永遠光	北海道美深高等学校1年	22
	「他人事から自分事へ」	篠原佳鈴	徳島市立立高等学校2年	23

中学生部門

最優秀賞 「団結をもって拉致問題完全解決！」

新潟大学教育学部附属新潟中学校2年 古泉修行

今一三歳の僕は、充実した中学校生活を送っている。今日も部活動を終えて門を出る。学校の右手には青く美しい日本海が開ける。しかし、門に立つと必ず目に入るもう一つの景色がある。四〇年前、横田めぐみさんが北朝鮮に拉致された住宅街に入る曲がり角だ。付近には今も情報提供を求める看板が立つ。僕の学校の目の前で帰宅途中に拉致され、学校近くの海から船で北朝鮮に連れて行かれためぐみさんは、僕と同じ一三歳の秋、学校生活や家族との時間など、幸せな毎日を一瞬にして奪われた。今、どんな生活をしているのだろうか。極限状態の中で生きてきた恐怖や悲しみは、想像を絶するものだ。めぐみさんを思い、毎日僕の胸はキュッと締めつけられる。

ある日、アニメ「めぐみ」を観た僕は、拉致問題と戦い続ける家族の様子に改めて衝撃を受けた。家族にとっては未だ辛い現実。僕に何ができるだろう。いてもたってもいられず、母である横田早紀江さんの著書を買って読んだ。そこには、めぐみさんの失踪原因がわからず懸命に行方を捜した最初の二〇年間の家族の苦悩、拉致とわかった後は全てを犠牲にして解決に向け尽力する、家族の壮絶な人生が描かれていた。家族会の必死の呼びかけで、世間の関心は高まっていく。現在内閣総理大臣である安倍晋三氏も当初から理解を示し拉致問題対策本部を設置。少しずつ解決に向けた進展は見られた。二〇〇二年、北朝鮮は日本人拉致を認め謝罪し再発防止を約束。

五人の拉致被害者が日本に帰国した。しかし、未だ全員の帰国は実現していない。高齢となった家族の焦りも限界に近いのだろう。その中で、僕は伝えることの重要性を感じた。拉致事件報道後、ピラを配る、署名運動を行うなど有志の活動も増えていったからだ。必死の思いは周囲の人の心を打つ。行動を起こす人が増えれば、転機も生まれる。それを逃さず捉え、活動を拡大することが力を強くする。

僕は今後、「拉致」という言葉に敏感になり生活する。シンポジウムなどには積極的に参加し、「解決」という明確な目的をもって周囲に話題を提供する。友達は勿論、幅広い年代に拉致問題を浸透させ、認知度をさらに上げる。僕の話聞き、少しでも関心をもち、行動に移す人が増えることを目指すためだ。個性の違う人が多く集まれば、解決に向けた行動も多種多様になる。一人では解決できないことも、仲間を増やすことで大きな力を発揮できる。集団の力は偉大だ。協力者を集め、市民の力をもって国を動かす力と変えたい。

被害者と家族の失われた時間は二度と戻ることはない。しかし、再会が果たせたら、今までの努力も少しは報われるのだろう。「頑張った良かった」と笑顔で再会できる瞬間を僕も目指す。周囲に伝え続けることで、仲間や解決に向けたきっかけを作る存在になる。

優秀賞 「関心をもつことから」

北朝鮮の委員長と韓国の大統領が国境を越えて、握手したり、抱き合ったりするシーンがテレビのニュース番組で大きく取り上げられていました。また、アメリカが北朝鮮と会談をするという話題も毎日のように報道されていました。こうした時、テレビやインターネットで、「拉致問題の解決を期待する」といったコメントや記事をよく見ました。

僕は、「拉致問題」という言葉は聞いたことがありましたが、ずっと昔のことだと思っていたので、その「解決を」と聞いて、どんな問題なのかを詳しく知りたくなりました。そして、インターネットで「拉致問題」について調べてみた時に、「アニメめぐみ」を見つけました。

一九七七年、当時中学一年生だった横田めぐみさんは、さらわれ、北朝鮮に連れて行かれました。今の僕と同じ年齢の時に、突然、日常の幸せな生活をうばわれ、四〇年以上、あつてはならない人生を過ごしているということになります。どう考えても、考えられないことです。アニメでは、めぐみさんをうばわれた家族がどれだけ苦しい思いをしてきたのかが描かれていて、そのつらさが伝わってきました。めぐみさんが日本からいなくなって、もう四〇年以上が経ちますが、めぐみさんの両親は、今もずっと、めぐみさんを取り戻す呼びかけを続けているということを知り、めぐみさんの両親の中

では、めぐみさんは今も帰ってこなかった中学一年生のままなのかもしれないと思いました。

アニメで、めぐみさんの両親が、町でチラシを配る場面がありました。でも、通り過ぎる人たちは無関心で、受け取ってもらえなかったり、受け取っても捨てられてしまったりしていました。僕は、人権問題の解決は、その問題に関心をもつことから始まると思います。小学校の時に、アメリカのキング牧師の本を読みました。人種差別に暴力ではなく、抗議行動で立ち向かい、多くの人に差別のおかしさを訴えたキング牧師が残した言葉の中で、僕は、「私たちは敵の言葉ではなく、友だちの沈黙を覚えているものだ」という言葉を特によく覚えています。差別する人からのひどい言葉よりも、それを黙って見過ごしている人たちが残酷だという、この言葉に当てはめれば、「拉致問題」も、自分には関係ないとか外国との間のことだからどうしようもない、と考えることが、被害者や被害者の家族をさらに苦しめ、解決を遠ざけてしまうのだと思います。

「拉致問題」を解決するために僕にできることは、この問題を知っておくだけでなく、めぐみさんや両親、他の被害者や被害者家族の人たちがどんなこれまでを過ごしてきたのかを想像して、一日も早い解決を願うことだと思います。

三重県 松阪市立中部中学校1年 増井奏太

優秀賞 「他人事ではない身近な問題」

京都府 南丹市立園部中学校3年 高屋瞳華

「うち」皆さんはこの言葉を漢字で書けるだろうか。私は教科書を見ずには書くことができなかったが興味を持っていたり、身近な問題として考えていたりすれば書けたはずだ。例えば、友達は興味のある芸能人の名は漢字で書ける。もつといえれば自分の名前は難しい字でも書ける。拉致問題もそんな身近なものになるまで考えるべきなのではないだろうか。

私は拉致問題を、社会の授業で見た「めぐみ」の映画で深く知った。その映画を見る前、「拉致問題について知っている人？」という問いを先生は私たちに投げかけた。でも、手を挙げたのは三十一人中二人。私は、説明する自信がなかったので手を挙げなかったが、知っているつもりだった。でも、映画視聴後は反省した。「拉致問題は誰かが不幸にもどこかへ連れていかれた出来事」そんな私の軽い認識は吹き飛んだ。これは、人の尊厳を損ねる重大な問題であり、このグローバル社会を生きる私たち一人一人の問題であると。

映画の中で印象的なシーンがあった。街頭で配られためぐみさんのビラに目もくれず、そのビラを踏んで歩く人の姿だ。心の底からめぐみさんの帰国を願い、運動を続けている人たちにとって、この行為はとてもショックなものだ。単に紙を踏みつけられたのではなく、自分の心まで踏みつけられたような悲しみと落胆を覚えられたらう。

めぐみさんが拉致された当時の日本では、今ほど拉致問題に関心がなかったのだろうか。私はこのことが引っかけり家族に話をしてみた。すると、母や祖母の口から「横田めぐみ」さん「蓮池薫」さんの名前が出てきて、多くのことを教えてくれたのだ。近くにいた小学生の弟さえも「何の話か分かるように説明して。」と興味を持ってくれた。「家族で知っていることを伝え合い、共有し、知れたこと。」このことは拉致問題解決の一步となったように感じた。だから私は「拉致問題」について『興味関心を持つこと、知ること』が大切だと思う。そこから『伝え合う、広める』ことで拉致問題は『身近なもの』となるだろう。そうすれば皆の心に『この問題を決して許さない』という思いが大きく芽生え、解決に導いてくれるに違いないと思った。

人にとって最も悲しいことは、人から関心を持たれず、自分は孤独だと感じることだ。藁にもすがる思いでビラを配っていた人々の悲しみを払拭する方法は、この問題の解決以外にはあり得ないが、せめて『拉致問題を他人事でなく、常に自分の事のように思い、当事者の気持ちで考える心』を持つことで、悲しみを背負う人々の気持ちに寄り添いたい。そして署名活動やブルーリボン運動に積極的に参加し、その悲しみ、その心を身近なところから世界中に広める一人となり、この問題の解決を動かす一步となっていきたい。

特別賞 「変えよう、自分」

鳥取県 青翔開智中学校3年 木原寛太

今、なぜ拉致問題があるのか。なぜ北朝鮮は拉致するのかが分からない。拉致をしても何も始まらないし、誰もうれしくない。

ぼくは、アニメ「めぐみ」を視聴した。アニメなのに今まで見た中で、一番怖かった。でも、めぐみさんは、それ以上に怖い体験をしているのだ。拉致されて、船の中に閉じこめられた時、おそらくぼくは心が折れて、生きたくない衝動にかられると思う。それに対してめぐみさんは、泣きくずれはしたもののいつか帰れるという希望を持って、一生けん命に生きていたように思えた。そして、その気持ちを支える両親や兄弟たち。悲しいだけでは済まされない出来事であるからこそ、精一杯拉致問題を解決するための運動を続けた。ぼくは思った。離れていても心はつながっている。家族の絆は強く、無限大だ、と。

ところで、日朝首脳会談が2002年と2004年の2回行われた。その時に日本人拉致被害者は5人返還されたが、まだ生存者もいる。さらには、死者もいる。ぼくは、不思議すぎて、訳が分からない。この会談以降、未だに何もできない。やろうと、救おうと、拉致問題をなくそうとしているのに、やらないのではなく、できない。そのような世界であっていいのだろうか。そして、また会談を行い、拉致をなくし、平和な世界にするべきだ。アメリカが北朝鮮に非核化を求めているように日本も拉致問題解決に向けて、進歩するべき

だ。そういった行いが、世界的に拉致問題をなくすことにつながると思う。

では、どうやってこの問題の深刻さや重大さを伝えるべきか。それは日本政府のみならず、国民全体で協力すべきだ。問題解決に向けての活動グループを拡大し、世界的に発信する。そのためのお金を国民が募金して、費用を調達したりと、いろいろなことができる。誰かがしないと何も始まらない。

まずは、この問題を理解するべきだと思う。そうしないと何も感じることはできない。実際に「めぐみ」を視聴してからの心情が大きく変化した。思っていたよりもとても深刻。もし拉致されたら、誰に助けられるのか。家族、友人、もしかすると国民かもしれない。国民に助けられて、うれしくないと思う人はいるのだろうか。やられて嫌なことはやらない、うれしいことは相手も多分うれしい。国民の一人であるのだから、みんながやっているから自分がやらなくても大丈夫なんかじゃない。自分もやるんだ。その気持ちと行動が拉致問題のみならず、たくさんの問題解決につながる。

変わるのは世界だけではない。自分もだ。

特別賞 「拉致被害者の帰国を願って」

私は、小学校六年生の時に初めて「拉致」という言葉を知りました。アニメ「めぐみ」を視聴し、横田めぐみさんの事を知って「拉致」でこんなにも苦しんでいる人がいる事も知りました。その時、同じ日本人として苦しくなったり、少しでも早く日本に帰って来て欲しいと思いました。

日本政府が認定している拉致被害者は十七名です。その他の失踪者は全国で八百六十八名。こんなにも大勢の人が現在も拉致で苦しんでいるということは、これは日本全体で考えなければいけないことだと思えます。私は中学校に入ってから拉致についての授業を受けたり、実際の拉致被害者、地村保志さんが来て下さったの講演会を聞いたりして拉致についてより多くの事を学んできました。地村さんからは、拉致された時の状況、気持ち、北朝鮮での生活などを詳しく教えて頂きました。そして、実際の拉致被害者だからこそ、地村さんが私たちに教えて下さった事があります。

「これは、一人一人が拉致について知り、理解しておかなければならない事です。」
という言葉です。拉致は拉致被害者だけでなく日本全体で解決しなければならぬこと、そのために一人一人が拉致について理解する事を地村さんは教えて下さいました。

拉致被害者の内、地村さんを含め、五名が日本に帰国されました。

福井県 小浜市立小浜中学校1年 白野さくら

これはとても素晴らしい事です。でも、まだ十二名が北朝鮮に拉致されたまま残っています。その他、八百六十八名がまだ失踪者となっています。この方たちを一刻も早く助け、拉致問題を解決しなければいけません。拉致とは何か、どれだけ怖い事であり、多くの人が苦しんでいるのかを一人一人が知り、理解して、深く考えなければいけないと思います。

拉致被害者とされている横田めぐみさんは、私と同じ十三歳で拉致されました。部活の帰りに拉致されたそうで、今もまだ日本に帰国されていません。同じ十三歳で私がおも、横田めぐみさんの立場になったら北朝鮮での生活にたえきれないと思います。何かあったかも曖昧な状態で、日本に帰りたいと強く思うと思います。だから、そんな気持ちで北朝鮮で生活している拉致被害者に一秒でも早く帰って来て欲しいです。そして、拉致問題が早く解決したら良いと思います。

そのために、地村さんから教えて頂いた「一人一人が拉致について知り、理解する」という事を考え、それが拉致問題解決につながったら良いです。そして今現在、私が生活しているこの安全で安心な環境に感謝したいです。

特別賞 「人事ではない。拉致問題の真実。」

神奈川県 川崎市立西生田中学校1年 内田真実子

「拉致問題は、何の予兆も無く大切な人がうばわれる、悲惨な現実であり、周りにも悲しみを振りまくものなのだ。」

これが、私がDVDを鑑賞して感じた事です。皆さん、身内の人が急に居なくなり、辛く悲しい思いをした経験などがありますか。恐らく私は無いと思います。例えば、周りの人が亡くなって悲しくなるといふ出来事は、この世界で生きている限り、少なくとも一回はあるでしょう。しかし、拉致は何のきっかけも無く、自然災害のようにあつという間に襲つて来るのです。ですから拉致問題はこの世にあつてはならないと感じます。

一九七七年、十一月十五日。平和でありふれた横田めぐみさんの生活は、突然うばわれました。この日が横田一家の悲劇の幕開けとなつてしまったのです。めぐみさんは拉致され、北朝鮮に向かう船の中で泣き叫びながら壁などを引っかいた為、到着の時は手の爪がはがれそうになり、血だらけだったそうです。想像しただけで鳥肌が立つてしまいます。この時のめぐみさんと親の心は、真つ暗で深い悲しみと恐怖におぼれていた事でしょう。しかし、そんな心の奥底はそれぞれ違っていたのではないのでしょうか。なぜなら、めぐみさんの手が痛い事も気に留められない位の恐怖心と、親の悲しみは異なると思うからです。それから二十年の月日が流れ、めぐみさんは北朝鮮で生きているという情報が入りました。この報道は、メデイ

アでも数多く取り上げられ、国連でも会談が行われると同時に、両親は、「やっと娘に会える」と大きな希望を持ちました。しかし、問題解決は先送りされているのです。両親は、今も大切な人の帰りを待っています。

政府はこれまでに十七名を北朝鮮による拉致被害者として認定しています。では、なぜ北朝鮮は日本人を拉致したのでしょうか。北朝鮮は、朝鮮半島を統一しようとしていました。しかし、韓国人をよそおい、韓国にスパイを送るのは困難であつた為、日本人をよそおつて韓国にスパイを送るといふ案が挙げられたのです。日本政府はこれに対し、誠実な対応を求めています。私は、なぜ日本人でなくてはいけないのかと思います。世界に生きる人々は皆平等であるのに、こんな事になるのはおかしいのではないのでしょうか。

正直、私達が拉致問題を解決する為に尽力する事は難しいと思います。けれど、一番容易な対策は、もし自分だったら、家族だったらと、身近な人に置き換え、未来を守る事だと思えます。また、拉致被害者のご家族の方の話に耳を傾けてみたり、心情を考えるのも良いと思います。ともかく、人事だと投げやりに感じず、いつ襲つて来るか分からない拉致問題の解決に向け、国民全体で協力していけたらと思います。

特別賞 『めぐみ』を鑑賞して

社会科の授業で、「めぐみ」というDVDを見ました。北朝鮮に拉致された、横田めぐみさんとその家族の方々のお話です。テレビに映された家族は、仲の良い、いたって普通の家族でした。しかし、ある日突然その幸せは壊されてしまったのです。めぐみさん呼び続ける家族の悲痛な声、そして、めぐみさんが家族を呼び続ける必死な声が、今も頭に残っています。自分とほとんど歳が変わらない女の子が、突然、家族と引き離されるとい状況が、そして、大切な家族が、突然いなくなり、生死も不明だという状況が、私には想像ができませんでした。想像ができないほどつらい状況に、めぐみさんと、めぐみさんの家族は置かれているのです。

先日、横田めぐみさんが五十四歳の誕生日を迎えたというニュースを、目にしました。めぐみさんの成長を見守ることができません、ただただ時間が過ぎていき、本人に「おめでとつ」と言えない誕生日を迎える。めぐみさんの両親は、一体どのような思いをしているのだろうと思いました。

めぐみさんの両親、滋さんと早紀江さんは、娘に帰ってきてもらうため、そして拉致問題を解決するため、自ら運動を起こしました。娘への思いが、二人を動かしたのだと思います。「大切な家族と、もう一度会って、話して、誕生日には、直接『おめでとつ』を言いたい」。ただそれだけなのです。しかし、その思いは、なかなかうまく届き

徳島県 阿南市立新野中学校3年

川野優花

ません。めぐみさんのように、北朝鮮によって拉致され、生死が不明な人がいます。きつと、その人達にも、ずっと帰りを待ち望んで、待っていてくれる家族がいると思います。だから私は、早く拉致問題が解決し、被害にあった方と、その家族が再会できればと思います。

拉致問題解決のため、もっと拉致問題について話し合いをしてほしいと思います。たかが数人、されど数人。その人達にも、大切な家族がいます。それは、どの国でも、どの時代でも同じでしょう。私は、まだまだ社会のことなど分かりません。しかし、私は、世界を平和にしていきたいためには、それぞれの国どうしが抱える問題を、平和な方法で解決していくべきだと思います。もし、拉致問題を解決すれば、日本と北朝鮮の隔たりは、少しでも小さくなると思っからです。そうして、少しずつ隔たりを無くしていけば、いつしか隔たりはなくなるのではないかと考えました。

「大切な家族が突然いなくなったら」なんて、想像もしたことがありませんでした。いるのが当たり前、そう無意識に考えていたからです。一緒に笑って、話して、そして、一緒に誕生日を祝ってくれる家族。「めぐみ」のDVDを見て、それが当たり前でなくなることもあると知りました。だから、自分の家族との時間を、大切に過ごしていきたいです。

特別賞 「人生を奪う拉致」

北朝鮮により多くの人々が拉致された。多くの人々が人生を奪われた。そして、もっともっと、多くの人々が悲しんだ。

私は、小学生の時、初めて、日本人拉致問題についてのアニメ「めぐみ」を見た。そして、中学生になり二回目を見た。私は、この小浜の公園で拉致された人がいることは、以前から知っていた。でも、どうやって拉致されたのか、その後、どうなったのか等は、何も知らなかった。ただ単に怖いなと思うだけで、他人事だと思っていた。しかし、アニメ「めぐみ」を見てから、他人事で済ましては、いけないと思うようになった。

拉致被害者は急に船に乗せられ、どれだけ怖かったか、苦しかったかと考えると、拉致なんて二度と起こってはいけないと思う。そして、拉致被害者の親、友人も、とても悲しむと思う。北朝鮮の人がどうしてそんなことをしたのか、それは、日本人には、誰にも分からない。でも、そんなことをする北朝鮮は絶対に間違っていると思う。もし逆に、北朝鮮の人を日本が拉致したら、北朝鮮は、どんなことを考え、どんな行動をとるか、もし、ということを考えてほしい。相手の立場になって考えてみてほしいと思う。

今も、北朝鮮で、毎日を暮らしている人がいる。なのに、拉致を他人事と思い、何も気にせずに毎日をすごしている人が大勢いる。もう少し、同じ日本に住んでいる人として、関心を持ってほしいと

思う。

そして、早く拉致被害者が日本に帰ってきてほしいと思う。そのためには、もっともっと多くの人が拉致について知り、考えることだと思う。そして、私も、私以外の人も、ずっと関心を持ち続けることが大切だと思う。後は、次の世代へ伝えていくこと。北朝鮮が早く自分ができることは、間違っていると気付き、一刻も早く拉致被害者を日本にかえしてほしいと思う。そうすれば、日本と北朝鮮は、もう少し仲良くなれるかもしれないし、それが世界平和につながると思う。私達ができることは、拉致被害者、そして、その親、友人に直接つながっているわけではない。でも、私達ができることを少しでも、していけば、必ず力になれると思うし、協力できるかもしれないと思うから、一日も早い帰国の実現に向けて、しっかりと今、するべきことを、していきたいと思う。

福井県 小浜市立小浜中学校1年

石田みずき

高校生部門

最優秀賞 「今こそ四十年の時を経て」

愛媛県立松山東高等学校1年 藤岡 希

空港に着陸した一機の飛行機。ブルーリボンをつけ、タラップを下りる横田めぐみさん。歴史的瞬間に、日本、そして世界が注目する。もし、めぐみさんが日本に帰ってきたらどうなるのだろうか。私たちが何度も写真で見た面影の残るめぐみさんの顔。涙を流す横田夫妻の顔。夫妻が彼女と会うのはあの時以来ということになる。一九七七年、彼女は十三歳という若さで北朝鮮に拉致される。すべてを奪われた悲しみ。生死もわからない娘を想う両親の悲しみ。時が止まったような中で家族が笑い合うことはなかったかもしれない。彼女の誕生日を迎える度に苦しみ、成人式の着物姿も見られず、彼女と同年代の人の子どもを抱く姿を見ては悔しさがあふれたかもしれない。他にも多くの人が拉致された中で、五人が帰国を果たした二〇〇二年、それは私が生まれた年でもある。問題が起きた後で生まれた私は、知識を得るためにアニメ「めぐみ」や舞台劇「めぐみへの誓い―奪還―」を見た。もし自分がと考えるのが怖いほど衝撃を受け、いたたまれない気もちになった。

残酷な拉致問題はなぜ起きたのか。主な目的は韓国へのスパイの日本人化といわれている。では、罪のない人を巻き込む北朝鮮人は道徳がないのか。ある記事で北朝鮮人は「幼い頃から残酷な人権侵害行為を見ているため、事の善悪が判断できない」と述べている。北朝鮮は、国家第一の「法より拳が強い」社会となっている。道徳

の有無ではなく、常識がまるで違うことが、日本人にとって残酷な人権問題を生み出したといえる。

この問題が四十年以上経った今でも解決しないのはなぜだろうか。拉致問題が決着しない限り経済支援はしないという日本。日本が朝鮮半島を支配した過去に怒りを覚え、拉致問題は解決済みと言い張る北朝鮮。拉致問題の解決が先か国交正常化が先か。両国が譲ることなく時が経っている。人権問題として深く考えられる一方で、この問題には政治的背景が絡んでいる。もはや国家間の駆け引きの道具となっているのだ。政治家でさえ何年も解決できないほど複雑化したこの問題を、動かせるものはあるのだろうか。もしあるならばそれは、私たち一人一人の意見、そして世論の形成だと思う。四十年前とは変わり、今はインターネットやSNSで世界と繋がれる時代だ。北朝鮮の情報通信も変化しているらしい。今なら、世界の発信力でこの問題が動き出すかもしれない。大きな世論の力で、人の考えを変えられるかもしれないのだ。そのために私にできることは情報の収集と意見の発信だろう。大きすぎる拉致問題を少しでも知り、仲間と意見を交わし、この作文のようにそれを形にする。そして、二度と繰り返さぬよう後世に伝えていく。解決を願い、この小さな積み重ねを続けていこうと思う。

優秀賞 「変わらなくてはならない」

福島県立会津農林高等学校1年 岡島真優

何故今まで深く知ろうともしなかったのだろうか。私は自分に嫌悪感を抱きました。

みなさんは北朝鮮による日本人拉致問題と言えば何を思い浮かべますか？大体の人は名の通り北朝鮮が日本人を拉致した、と思いつけるでしょう。私もそう思い浮かべる者の一人でした。深く知ろうとせず、思い浮かべるだけ。これからもそうやって過ごしていくと思っていました。

「めぐみ」のDVDを見て、心が痛めつけられました。怒りで体が震えました。北朝鮮に拉致された当時、横田めぐみさんはまだ中学校一年生、十三才でした。暗闇の中で自分に今何が起きているか、これから何が起ころるか分からない恐怖。大好きなお父さん、お母さんに会えない悲しさ。抱えきれないほどの恐怖と悲しさ、そして絶望感でいっぱいだったと思います。もし私だったらどうしようと思身震いが止まりませんでした。DVDを視聴した夜、不安に駆られ思わず母に

「もし私が突然いなくなったらどうする。」
と聞いてしまいました。母は少し目を見開いた後

「そんなこと考えたことないし、考えたくない。」
と顔をしかめて答えています。最愛の娘が突然いなくなることで、両親は想像すらしないと思います。しかし、めぐみさんのご両親

親は最愛の娘を突然失ってしまったのです。なぜこのようなことが起こったのか、真相は未だ闇の中です。

横田めぐみさんを含め、十七名の拉致被害者、そしてご家族はこの瞬間も再会を信じて闘っています。私たちは北朝鮮による日本人拉致問題を「知っている」だけで良いのでしょうか。思い浮かべるだけで良いのでしょうか。何も変わらなくて良いのでしょうか。

いいえ、知ったからには変わらなくてはなりません。私たちにもできることがあるはずですよ。私はまだ自分にできることを見つけだせてはいません。しかし、この気持ちを持っているだけでも大きな一歩を踏み出せていると思います。拉致問題を決して忘れず自分のできる事があれば積極的に取り組む姿勢を忘れない、それだけで大きな一歩だと思えます。

先日から私のカバンには「ブルーリボン」がついています。ブルーリボンは、拉致被害者とそのご家族が、国境のない青い空と海を見上げて、無事に再会する時を願う意思表示です。私はこのブルーリボンと共に未だ解決されていない北朝鮮による日本人拉致問題への関心を高めていきたいと思っています。忘れないでください。この問題について一番大切なのは関心を持つことです。思い浮かべて終わってしまうのではなく、その次へ進まなくてはいけないのです。拉致問題が完全に解決するまで、私も皆さんと共に歩み続けます。

優秀賞 「北朝鮮人権侵害問題」

福島県立平支援助学校高等部3年

谷 康大

横田めぐみさんは、一九七七年（昭和五十二年）十一月十五日、十三歳の時に新潟県新潟市において新潟市立寄居中学校からの下校途中に北朝鮮の工作員に「拉致」されました。

僕は十三歳の子供、中学生が、ある日突然北朝鮮に連れ去られたという驚きと、バドミントン部の活動の帰りという身近な日常生活の延長線上に「拉致」という犯罪が潜んでいたということに恐怖を感じました。「拉致」という行為は、「拉致」された人の人生やその人の家族の人生、そして「拉致」された人につながるいろいろな人の人生をズタズタに引き裂いてしまいます。これらは、犯罪であると同時に人権侵害です。僕は怒りを覚えました。

北朝鮮は日本人を連れ去った上で、日本の習慣や言葉をスパイに教える先生にして、北朝鮮人を日本人になりすませたりするという元々は、北朝鮮が韓国を社会主義国にして朝鮮半島を統一しようとした事から「拉致問題」が、始まっています。日本人を「拉致」する以外に方法はなかったのか。何故日本語をスパイに教えるためだけに様々な職種の人を拉致する必要があったのか。「拉致」は、全て北朝鮮の身勝手な理由から起きている犯罪です。

障害者権利条約というものがあります。これは、身体障害者、知的障害者、精神障害者の尊厳と権利を保障するものです。僕は障害者をもっていますが、日本は勿論、世界中の障害者の権利は守られて

います。つまり、人権が守られているということです。僕は、僕達は障害者の人権にかかわる歴史を調べたことがあります。僕達は障害者は明治時代になっても、国の役に立たない存在、社会に不要な存在とされてきました。僕達、障害者は、第二次世界大戦後、法整備が整い始め、ようやく人権が保障されるようになり、現在は誰もが自分らしく生きられる社会になってきました。

人権が保障されない社会だったら、僕は苦しくて恐ろしくて、生きる事が辛くなると思います。

北朝鮮に「拉致」された横田めぐみさんは今、何を思っているのでしょうか。横田めぐみさんは今、僕達、障害者が人権を無視され続けた歴史の中の憤りを二〇一八年の今現在、感じ続けているのではないのでしょうか。差別を受けて苦しんでいるのではないのでしょうか。

僕には妹がいます。その妹が横田めぐみさんのようにある日突然、北朝鮮に「拉致」されたとしたら、僕は一人でも「妹を返せ」と、北朝鮮に声を上げます。だから、横田めぐみさんのことを「元気でいますように」とか、「無事帰ってきますように」とか願うだけではなく、僕達、日本中のみんなで「めぐみさんを返せ！」と北朝鮮に向かつて声を上げていくべきだと思います。

特別賞 「思いを広める」

石川県立田鶴浜高等学校1年 米澤 愛

「しつこい」「どうでもいい」「もういい」拉致問題と検索して関連キーワードの欄に出てきた三つの言葉に衝撃を受けた。国交正常化のためであるとか、不幸に遭っている人はもつとたくさんいるのにとか、人の思いより自分の考え、人のことより自分の欲求を満たそうとしている。確かに多くの人が拉致された昭和五十三年からもう四十年がたち解決までに残された時間は限られている。でも、昨日の騒動も明日になれば新たな出来事によつて表からは消えてゆくこの社会で、忘れられるということに、関心をもたれないということに強い悲しみを受け、絶望を抱いた人たちは今も必死に闘い続けている。「拉致問題」という人生を奪つ残酷な行為を風化させない為に、家族がいることも、学校に行けることも、決してあたり前ではない。幸せなことで、いつ事件や事故に巻き込まれてもおかしくない。今日一日たまたま平和に過ごせただけで、明日が平和な日である保障などない。何の罪もない人たちから、ある日突然、夢、希望、未来、人生を奪い去り、恐怖と苦しみだけを残した残酷な事件。巻き込まれていない私たちに出来ること、すべきこと。それはまず、知ろうとすること、関心をもつこと、他人事だと思わないことだと思つた。拉致問題の進展を訴え、ピラ配りをしていた家族の手を払いのけた女性、冷たい目で見ていた人、気にもせずピラを踏みつけていった人、「めぐみ」を視聴してその光景を見た時、胸が苦しくなった。

蓮池薫さんの兄、蓮池透さんが書いた「奪還」という本に書かれていた「同じ日本人という感覚が信じられなくなってくる」という思いを知った時、息が詰まった。拉致被害者の家族は、止まったままの時を動かすため、ささやかな幸せを取り戻すため、雨の日も風の日も、炎天下でも寒空の下でも全国をとびまわり呼びかけている。「ただいま」と無事に帰ってくることを望みながら。

もしも私が拉致被害者の家族だったら、大切な人を失い何も手につかなくなるだろう。生きる意味を見失うだろう。何としても取り戻す為、訴え続けるだろう。今の「家族会」のみなさんのように。だからこそ、私も訴えようと思つた。インターネットが普及した社会で、私が抱いた「拉致」に関する思いや考えをSNS等を利用して。簡単な問題ではないからこそ、多くの人の力が必要である。だから私も少しでも力になる為にただ同情するのではなく、ただ真実を伝えるのでもなく、苦しみや恐怖、抱いた感情を発信していこうと思つた。それが私に出来ることだと思つた。多くの情報を容易に取得することのできる社会で残酷さを広めていくために。

「ただいま」と帰国できると信じ続けて。

特別賞 「拉致問題は世界の問題」

広島県立呉昭和高等学校3年

田中優里

このアニメを見て、私の心は北朝鮮政府に対する反感と複雑な憤りに覆われました。

私は、これまで拉致問題について、ニュースで見る話題の一つとしてしか認識しておらず、深く考えたことはありませんでした。しかし、このアニメを見て、自分の無知を恥ずかしく思い、改めて自分で調べてみようと思えました。調べる中で、横田めぐみさんのご両親が、北朝鮮に対して「はらわたが煮えくり返るばかりだ」と強い怒りを示していることに、深く共感しました。特に、横田めぐみさんの遺骨を送ってよこしたことについてです。DNA鑑定をすれば分かるようなごまかしを、国の対応として行うという体制に、私も不信と憤りを覚えましたし、ご両親の悲痛な怒りを察しました。このように、北朝鮮側の報告は、報道や脱北者の証言とも矛盾が多く、その場しのぎの嘘やごまかしばかりだという印象を持っています。それに対して、横田めぐみさんご家族は、「娘は生きています」と信じ続け、署名活動や講演活動をねばり強く行い、アメリカ大統領との面談までなされたことに、本当に感動しました。このように長い年月、強い思いを維持することは、大変なエネルギーを必要とするだろうと思います。そして、この尊敬すべき取り組みから、一人の人権を尊重する世界にするためには、この問題を本当の意味で解決しなければならぬのだということを確認しました。

今、私たちがやらなければならないことは、二つあると思います。一つは、この問題の現状と本質を知ることです。そして、知ることが私たちの活動のスタートラインになると思います。二つ目は、この問題意識を広めることです。問題意識を広めることは、私たちの活動を「ゴールに近づける手段になる」と思います。

もちろん、実務的には日本政府が解決に導くよう交渉しなければなりません。しかし、解決できる日本政府を作るのは、国民の声と意志によるものです。拉致問題に深く関心を持ち、解決を切望する声が世界中に広がって無視できないほど大きくなれば、日本政府も実務的な解決に向けて大きく動き出すでしょうし、世界の世論も拉致問題の解決に向けた流れを生み出すのではないのでしょうか。

横田めぐみさんのお母様は八十二歳、お父様は八十五歳で闘病生活を送っていらつしゃいます。もうのんびりと構えてはいただけません。この問題の解決のために最も尽力なさった当事者の方々の努力に報いるためにも、早急に解決しなければならぬ問題なのです。

この問題は、拉致の被害にあった当事者だけの問題だけではなく、一人の人権を尊重できる世界を作るといって、世界全体の問題なのだと思えます。

特別賞 「未来を創る」

「行ってきます。行ってらっしゃい。気をつけてね。」私達が毎日のように交わす言葉。その何気無い一言が家族にとって我が子との最後の会話になるとは、その時誰に想像できただろう。日本と北朝鮮。その間を阻むように立ちはだかる日本海の壁。その海をめぐみさん、母早紀江さん、父滋さんはどのような思いで見つめるのだろうか。私たちと同様に友達と楽しい学校生活を送っていたためぐみさん。過去の思い出、家族や友人との生活、そして輝かしい未来まで奪われてしまい、北朝鮮という地で何を思うのだろうか。私にはその計り知れない恐怖や絶望を真に理解することは難しい。しかし、もし自分や自分の家族がそのような状況に立たされたらと考えると胸がぎゅっと締めつけられる。

拉致という悲劇から四十年が経過した今、未だに祖国の地を踏むことのできない方々がいる。これは日本に限らず韓国やタイ、ルーマニア、レバノン、中国にも該当する。拉致問題。それは国際的な人権問題だ。今年六月に行われた歴史的な米朝首脳会談。米国のトランプ大統領は拉致問題を重要な課題と位置付け、会談で提起したと発言した。国際社会の中で拉致問題への関心・注目が集まっている今、国際社会が協力してこの問題への対応を北朝鮮に迫っていくことが重要だ。そして何より日本として解決への断固たる決意を示し、直に北朝鮮と対話していく環境が必要であると私は考える。そ

山形県立山形東高等学校2年 長澤。ハテイ明寿

のためにはまず、日本全国で拉致問題への意識を高めることが欠かせない。私にとって今回『めぐみ』という一本のDVDが拉致問題を自分ごととして深く考えるきっかけになった。まずこの映像をきっかけに意見を共有し合い、関心と活動の輪を広げていきたい。私は現在、高校生が主体となつてドキュメンタリー映画を自主上映する活動に取り組んでいる。その自主上映会の際に『めぐみ』を上映していくことは、輪を広げる大きな第一歩になると確信している。

今年の夏、私は板門店を訪れた。どこまでも続く雲ひとつない青空。しかし、数メートル先にあるコンクリートブロックの上には高くそびえ立つ見えない壁があることをひしひしと感じた。日本と北朝鮮。両国を隔てる青い海にかたい絆の橋がかかり、全ての人が笑顔で暮らせる世界を共に創造していくために、未来志向で「拉致」という大きな問題に取り組んでいく必要があると私は強く思う。そして、これからの日本、世界を担う私達若者の積極的な参加こそキーポイントになるだろう。二度と繰り返してはならず、早期に解決しなければならぬ問題、今はまだ、近くて遠い国との良好な関係づくりにおいて、私には何ができるのか。現実をしっかりと見つめ、理想に向かって多くを知り、学び、考え、様々なことに挑戦して声を上げ続けていきたい。

特別賞 「拉致問題から学んだこと」

北海道美深高等学校1年

佐久間永遠光

現在、日本政府は十七名を拉致被害者として認定しています。その中の一人である横田めぐみさんは、一九七七年十一月十五日、クラブ活動を終えた帰り道に拉致されました。その時のめぐみさんの

気持ちになってみると、何も知らない人や言葉が周りにあり、不安と恐怖を感じたと思います。それから、家族や友達に会えない寂しさがあつたと思います。また、めぐみさんの父と母は、娘のために呼びかけを行っていました。そこから、父と母の、めぐみさんにもう一度会いたいという気持ちが伝わってきました。私はこの話を聞いて、いつもの日常が来ることは、あたりまえではないということを感じました。北朝鮮に拉致されたことで、家族や友達、故郷など、何もかも一瞬にして失ってしまいました。なので私は、後悔のないよう、その日その時を大切に生きていきたいと思いました。

それでは、なぜそもそも日本人は北朝鮮に拉致されたのでしょうか。様々な憶測が立てられています。その中の一つに、韓国にスパイを送りこむためという考えがあります。なぜなら、北朝鮮は朝鮮半島を統一しようと考えていたからです。そのため、韓国人よりも日本人に装って韓国にスパイを送りこむの方が難しくなかったため、日本人が拉致されました。私はこのことを知って、拉致すること自体許せないことですが、もしこの憶測が事実であれば、もっと許せません。なぜなら、日本人を人としてではなく、道具として

で見えていないからです。私は、人は誰もが人権を持っているので、尊重されるべきだと思います。

私はこのことから、私たちにできることを二つ考えました。一つ目は、相手のことを考えて行動することです。この拉致問題は、拉致された人はもちろん、その家族や周りの人たちの生活までも、大きく変わってしまいました。相手の気持ちになって考えていけば、このような事件は起きなかつたはずですが、私も普段の生活から、相手のことを考えて行動していきたいと思っています。

二つ目は、拉致問題に関心をもち、理解することです。「自分には関係のないことだから」で終わらせるのではなく、「もし自分が、家族が、友達が、拉致されていたら」と、自分に置き換えて考えてみると、拉致被害者やその家族の気持ちの方が、より理解できると思います。理解することで、一人一人自分の意見が持てるようになり、その意見を合わせることで、新たに拉致問題解決のための方法が、見つかるのではないかと思います。

最後に、現在は拉致被害者として認定されている十七名のうち、五名しか帰還できていない状況です。私は、拉致された全ての人が帰還できるよう、政府には、北朝鮮との話し合いを粘り強く行ってほしいと考えます。

特別賞 「他人事から自分事へ」

徳島市立高等学校2年 篠原佳鈴

「命の時間がありません。早く返してください。」

私たちは拉致被害者のご家族の声にどれほど真剣に耳を傾けているだろうか。日常のニュースとともに聞き流してはいないだろうか。

「拉致問題は自分には関係がない。」私もそう思う一人だった。新聞やテレビを通して何度か聞いたことはあった。ただ、拉致問題を深く知ることは抵抗があった。そんなことは絶対ないとわかってはいたが、自分や家族に危害が及ぶような気がしていたのだ。

こんな自分を変えたのは学校での委員会活動だ。夏休み中に人権問題に関するレポートを書く課題が出され、拉致問題の担当に選ばれた。私にとってレポートを書くことはあまり気乗りしないことであつた。

しばらくして、『めぐみ』というアニメがあることをネット上で知つた。このアニメは十三歳で北朝鮮に拉致された横田めぐみさんを題材にしたものだ。不安な思いがあつたが、何かヒントになればと思ひ、視聴することにした。

彼女の身に起きたことは、同世代の私にとって他人事ではなかつた。今まで自分が拉致問題に対していかに無知であつたかを思い知らされた。同時に、どんどんと恐怖心が押し寄せてきた。

たった一日で激変した彼女の人生。家に帰れば家族がいて、学校に行けば友人がいる。何げない日常を奪われた怒りや悲しみは想像

もつかない。何よりも自身の将来を壊されたことは筆舌に尽くしがたい苦しみだつたに違いない。誰しもが将来を思い描く十代。彼女も明るい希望を持っていたはずだ。それを叶える機会が自分にはないと知つた時、私であつたら死を選ぼうとしただろう。

それでも、私は彼女が今も生きていると信じている。あくまでも個人的な想像にすぎないが、「幸せ」と呼ぶには程遠いかもしれない彼女なりの「幸せ」をつかみとろうと必死にもがいていると思つ。それは家族に会うため、這いつくばつても生きるという強い信念がそうさせているのではないか。

今、拉致被害者のご家族の高齢化が進んでいる。すでに亡くなられた方や、病気になる方も少なくない。そして、今後ますます、ご家族が活動されることは困難になるだろう。

こうした中で、私たちの力が欠かせない。私たち一人一人が拉致問題を心に留めておく。このことは被害者やご家族を支える力になり、やがては被害者の帰国への糸口になるのではないか。

この夏、私は変わった。自分の固定観念を捨てて、一歩踏み出してみる。その一歩が私を成長させてくれた。これからは拉致問題を正しく人に伝えていけるよう学びを深めたい。

この作品集は平成 30 年、政府拉致問題対策本部の主催により実施された
「北朝鮮人権侵害問題啓発週間・作文コンクール 2018」応募作品の中から入賞作品を収録したものです。
文中の表現や表記は、原則として応募時の表記に従いました。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間・作文コンクール 2018 入賞作品集

平成 31 年 1 月発行

【発行】政府拉致問題対策本部
〒100-8968 東京都千代田区永田町 1-6-1
TEL：03-3581-8898
<https://www.rachi.go.jp>



平成31年1月発行